

ブラダーウィリー症候群の1例

○豊島 正三郎

たんぽぽこども歯科

【緒言】ブラダーウィリー症候群（PWS）は15番染色体の異常に起因した症候群である。10年以上にわたり口腔管理を行っているPWSの患者について報告する。

【症例】患者：初診時年齢15歳6か月（2003年12月）、女子

主訴：齲蝕処置

現病歴：歯の痛みがあり、精査、治療を希望して来院

既往歴：仮死状態にて出生。入院中にPWSの疑いを受けるも染色体異常については明らかにならなかった。12歳時、15番染色体異常が確定、PWSの診断を受ける。

【経過】齲蝕処置は2004年4月に終了。同年6月に定期検診。その後は定期的には受診せず、齲蝕罹患、歯痛、修復物脱離などの際に受診することが多かった。1年以上受診しないこともあり、その度に齲蝕新生、2次齲蝕の発生を認め、歯髄処置、抜歯に至る事もあった。発達遅滞はあるものの、処置はTSDにて概ね可能であったが、時折、開口を拒んだり、治療中に頭振することもあった。

【考察】本症例の口腔管理にあたっては本症候群の特徴である精神発達遅滞・情緒不安定等による行動管理の困難性、過食（中でも間食）・エナメル質形成不全・清掃不良等による齲蝕の易罹患性、等の問題点がある。本症例は食欲亢進のため通常の食事では満腹感が得られず、間食に甘い物を好んでとっている。また、本人によるブラッシングのみで、口腔清掃が不十分である。さらに通院について、本人の精神的な問題や保護者の時間的な問題等により通院間隔が長期間に及ぶことがあった。

今後、過食による肥満を防止するためにもできるだけ甘食をさけることを引き続き指導していく必要がある。口腔清掃については、これまで、本人のみへの指導であったが、保護者への指導も行い、保護者による口腔清掃も行う必要がある。フッ化物の積極的な応用も必須である。

開業20年を振り返って一患者様の実態調査

○林 亮子

はやし小児歯科医院（福岡県）

【目的】当医院は平成5年11月1日福岡市近郊の糟屋郡粕屋町に開業。福岡市のベッドタウンであり、マンションや一戸建て、核家族や三世帯同居世帯が混在した地区で、全国的にカリエス減少傾向の中、未だランパントカリエスも認められる。この地で昨年無事開業20年の節目を迎えられ、これまでの患者様の動向を振り返り今後の医院の在り方を検討すること。

【方法】平成6年4月より5年毎に問診票やカルテ等から来院数・新患数、初診時年齢、主訴、来院経路、来院地区、中断率について集計グラフ化し、比較検討した。

【結果・考察】1）来院数・新患数は10年目で減少したが、その後回復した。これは乳幼児医療制度の拡大やう蝕多発傾向者へのフッ化物歯面塗布の導入など保険制度の改革の影響があると考えられ、来院数を維持していく上で診療の質に加え患者様の負担軽減を考慮することも重要であると思われた。2）初診時年齢は6歳児までが圧倒的に多く、中でも3歳児以下が多かった。平成26年度の1位は1歳児であった。3）主訴は平成6年度から21年度まではむし歯他疾病が6～7割、予防・検診が約3割、咬合その他が1割弱であったが、26年度は疾病と予防・検診がほぼ同率であった。2）、3）より早期からの予防への関心が感じられた。4）来院経路は紹介や兄弟来院があり常に過半数以上であった。広告の効果は平成6年度約1割その後減少していたが、26年度は2割弱まで上昇した。これはインターネット広告の効果と思われた。5）来院地区は同地区及び隣接地区が9割を占めていた。6）新患様の処置中断率は約1割であった。

【まとめ】当医院は低年齢児からの治療を中心とした診療内容であったが、近年予防を主訴のより低年齢の患者様が増えてきたので適切に対応していくと共に、地域密着型の小児歯科専門医院として地域医療へのさらなる貢献を目指しスタッフ共々研鑽していきたい。また今後の検討項目としてリコールに関する調査を行ってきたい。